留萌と びと

あなたは、どう思いますか？

その責任の所在はどこに…役人の感覚と市民の感覚は違う？

——そこには、広報係長と同僚の真中さんがいた。

係長「それは土木課の言うとおりだ。市には予算ってものがあるんだから、おのずと限界もある。市民が自分たちでできることをするのは、当たり前でしょ」

真中「ちょっと待って。それって責任放棄なんじゃないかしら？ 市道を管理するのは市役所でしょ。だったら予算を他からまわしてでも、やらなきゃいけないんじゃないの？」

係長「でも、税収は減ってるし、市役所の仕事は、除雪以外にもいっぱいある。どれも大事な仕事なんだよ。除雪だけに予算を回すわけにはいかないだろう。やっぱり、限界はあるんだよ」

真中「でも、道路は市民の誰もが使うものなんだから、やっぱり市役所がやるべきでしょ！ 留萌くん、そう思わない？」

——結局意見はまとまらず、ぼくは混乱したまま帰宅した。そして夕食の時、昼間の話を妻のひとみに話してみた。

ひとみ「そういえば、この前の会社の飲み会で、こんな話があったの——」

■

窓際「留萌さんのダンナさんは市役所にお勤めでしたよね。もう少しで雪の季節でしょ。毎年思うんだけど、除雪車が俺の家の前にだけ、やたらと雪を残していくんだよな。あの重たい雪を」

乙骨「あ～ら、それを言うなら、うちだってそうよ。わたしなんか男手がないから、あの雪を片付けるのって、とっても大変。市民へのサービスってことを考えて欲しいわね」

窓際「除雪ばかりじゃなく、市立病院だってひどいぞ。新しくなったからと思って、期待して行って来たんだけど、医者も看護婦も職員も、相変わらずだね。病院なんだから、別に病気が治りゃいいんだけどさぁ、やっぱり医者と患者って言っても、人と人でしょ。なんだか冷たい感じがしたんだよね」

乙骨「あら、それを言うなら、『ぷるも』だってそうよ。職員なのかどうだか知らないけど、お客に対する態度がなってなかったわ。もう少しプロ意識ってものを持って欲しいわね。どうなのよ、ひとみさん」

ひとみ「……」

■

留萌「ひどいな、そりゃ。みんな好き勝手なこと言ってるんだなぁ」

ひとみ「でもね、だいたいの市民は、こんな感じよ。どうしても役人の感覚と市民の感覚には違いがあると思うの。そもそも、わたしたちがどうして税金を納めているか分かる？ それは、税金がわたしたちの暮らしを、より快適にするために使われると思っているからなのよ。だとすれば、わたしたちは税金を払ってるんだから、きれいに除雪をして欲しいと思うのも無理ないんじゃないの。逆に、そうすべきなんじゃないかしら」

留萌「でも、市民からは、その立場、立場でいろいろな要求があるんだよ。除雪もそうだし、福祉も、港もね。除雪で、雪のないきれいなまちができても、福祉のサービスが低下したらどう？ 除雪もたっぷりします。福祉のサービスも、港湾建設も。そのためには税金がもっと必要です、ってことになったらどうする？ 税金を値上げしてもいい？」

ひとみ「チョット待って、それって一方的じゃないの？ だいたい、お隣のおばあちゃんみたいに、お年寄りが一人で暮らしていて、やろうと思っていてもできない場合もあるし、自分の家の前すら除雪できない人がいることも、ちゃんと考えて言ってるの？」

留萌「それは、福祉の問題じゃないのかな？」

ひとみ「仕事が増える＝税金の値上げじゃなく、まず、無駄な仕事を止めればいいんじゃない？ いま市役所がしている仕事の全てが必要なの？ わたしの会社では、いつも話題になるわよ」

留萌「市役所の仕事にいらない仕事なんて…」

——その問いにぼくは答えることができず、いつになく苦いビールを流し込んだ。

「市役所の仕事って、いったい何なんだろう？」

市役所の仕事の限界、必要な仕事、責任、予算の制約。市民の要望、税金の負担…。

そんなことを考えていたら、いつの間にか眠ってしまった。

市役所の仕事とは、なにか。

市役所は、法律や条例、規則などの法令に基づいて、公共のサービスを提供しなければならないのです。そうじゃないと、職員が、何の基準もなしに、勝手に判断してやってたら、公平性を保てないからね。だからぼくたちは、市民の要求に対して『調査検討→企画立案→実行→効果』という行程でサービスを提供することになる。あとは効果があったのか、今後も継続する必要性があるかを検討する。

この繰り返しですね。

（留萌ひとし）

翌日、出勤早々、広報課長に昨日の疑問を話してみた。

市役所の限界、そして市民の限界 市民参加はお役所の勝手な都合!?

課長「市役所って言うのは、まちづくりをしていくプロ集団として、市民が生活しやすい環境を作るのが仕事だってことは分かるよな」

留萌「例えば、除雪なら、市民が生活しやすいように、市役所がきれいにすべきだってことですよね」

課長「ただし最低限のな。例えば、市内の交通渋滞が起こらないように道路網の主要なところをまず除雪するだろ。バスや救急車、消防車が走れないとみんなが困るからな。次に、通勤や通学ができるように、と考える」

留萌「そういう優先順位は分かりますけど、住宅地の細い道やカーブミラーや横断歩道の信号待ちになる所はどうなるんですか？」

課長「それを考える前に、ちょっと視点を変えてみよう。君は、市役所の限界って分かるか？」

留萌「……仕事の量と職員の数のバランスが取れなくなったときですかね」

課長「確かに。でも、それは市に予算があれば、人員を増やすことが出来るよな。つまり、市役所の限界は『予算の限界』＝『税金』となるわけだ」

留萌「じゃあ、市民の限界は何でしょうね？」

課長「市民一人あたりが納められる税金には限界があるだろ？ であれば市民の限界は、市役所の仕事に対する『投資の限界』だろうな」

留萌「なるほど」

課長「どちらにも限界がある以上、どこかでお互いの役割を線引きする必要が出てくるわけだ」

留萌「その境界線は、誰が、どのように決めれば良いんでしょうね」

課長「それは、市役所が市民の声を聞きながら、境界線を作り、それぞれの役割を決めるんだ」

留萌「それって、市民がどのように参加するのかを市役所が決めるってことですよね」

課長「本来は、市民が動かなきゃいけないけど、自分たちが動くなんて、そんな意識は市民には無いだろう。だから市役所が決めてやらないと、市民は動かないんだよ」

留萌「それって市役所の勝手な都合と解釈に聞こえますね」

課長「じゃあ聞くけど、市民が出来る仕事を、市役所がやっているとしたら、不利益をこうむるのは、市役所か？ それとも市民か？」

留萌「……」

課長「それは市民だろ。第一に『投資が増える＝税金が上がる』と言うこと。第二に『ムダな仕事＝ムダな時間・ムダな税金・ムダな労力を使う』と言うこと。それは、個人の税金が増えるだけではなく、まち全体の発展を遅らせることにもつながるんだ」

留萌「つまり、市民参加っていうのは、市民が市民やまちのために、自ら行動することなんですね」

課長「分かったようだな。そうなれば細い道の除雪やカーブミラーは、誰がやるべきかは、おのずと分かるよな」

——理屈では分かったような気はする。でも、どうも納得が…

日本の中高生は、社会参加の意識が低い

ボランティア活動に熱中すること

（%）

	日本		中国		韓国		アメリカ	
	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校
とてもそう思う	16.5	13.9	23.6	14.8	16.8	9.0	29.3	25.1
まあそう思う	43.1	43.6	44.8	48.1	56.8	58.9	45.7	42.6
あまりそう思わない	29.6	34.5	26.0	30.7	22.3	27.2	18.2	23.8
全くそう思わない	10.6	7.6	5.5	6.4	4.0	4.8	4.8	7.7
無回答	0.2	0.4	0.1	0.0	0.1	0.1	2.0	0.8

他人や社会のために貢献すること

（%）

	日本		中国		韓国		アメリカ	
	中学	高校	中学	高校	中学	高校	中学	高校
とてもそう思う	15.7	22.6	48.1	36.6	18.2	17.8	59.3	60.7
まあそう思う	45.0	46.8	38.6	47.5	60.2	61.4	31.2	32.4
あまりそう思わない	30.8	24.1	10.6	13.2	18.0	18.6	5.5	5.2
全くそう思わない	8.0	6.2	2.6	2.5	3.5	1.9	3.4	1.7
無回答	0.5	0.4	0.1	0.1	0.1	0.3	0.6	0.0

※財団法人日本青少年研究所「21世紀の夢に関する調」より